

## 奇想の系譜展 江戸絵画ミラクルワールド

東京都美術館（上野公園）

2019.02.09～04.07



美術史家「辻惟雄」氏の書籍『奇想の系譜』（1970年と1988年刊 東京ペリカン社）は、これまでに紹介されたことのない因襲の殻を打ち破り意表を突く、自由で斬新な発想で非日常的な世界な世界に誘われる数々の絵画を紹介している。

それから長年を経た現在では、かつては江戸時代絵画史の傍流とされてきた画家たちが、その現代に通じる革新制に依って“**熱狂的な人気**”を誇っている。

蕭白《雪山童子図》、国芳《宮本武蔵の鯨退治》との合作である。（左図）

伊藤若冲 《紫陽花双鶏図》 絹本着色 1759（宝暦9）年（中央図）、

作品には、輪郭線が無くて大部分の形象は色の面で表されて、雌鶏の嘴や脚の黄色の下には緑青が、顔の中央部にはピンク色の裏彩色が施されるなど、さらに、薔薇、つつじの細密描写や紫陽花の萼一枚ずつ超絶技巧は驚異である。

伊藤若冲 《「梔子（くちなし）雄鶏図」》（右図）

奇抜な画風で人気の江戸期の画家「若冲」の本作品は、1927年の記録以後所在不明であったのが、昨年、90年ぶりに見つかり確認されて注目されている。

地面をついばむ雄鶏とクちなシの木を描いた柔らかい色彩の作品は、画伯の30代の希少品とされるもので、細密描写と極彩色で知られる円熟期に比べて、やや“**ためらいが見られる画風**”で描かれているのが特徴であるとされている。

本展では、「岩佐又兵衛（いわさまたべい）」「狩野山雪（かのうさんせつ）」「伊藤若冲（いとうじゃくちゅう）」「曾我蕭白（そがしょうはく）」「長澤芦雪（ながさわろせつ）」「歌川国芳（うたがわくによし）」「白隠慧鶴（はくいんえかく）」「鈴木軌其（すずききいつ）」の8名の画家の作品を厳選して展示している。

他に、新たに見つかった「若冲」「又兵衛」「芦雪」の作品も展示されて、“**江戸のヴァンギャルド一挙集結!**”としての作品の公開が大変注目されている。